

(参考) 令和3年度 武蔵野市教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価 (令和2年度分)

5 点検・評価に関する有識者からの意見

東京聖栄大学教授 有村久春

令和2年度の各事業の推進にあっては、コロナ事態の中で多くの苦労があったものと推察しています。今般のヒアリングにおいても、各担当課の皆様が日々の状況変化に向き合いながら市民の学びを援助されたものと理解するところです。この努力と工夫に更なる改善を加えながら、次代の社会変貌と子供の成長を見据えた事業展開を期待しています。

1 事業1 学校改築計画の推進

本事業は、<美しくしかも機能性ある学び舎>で学ぶ本市の子供たちの成長そのものを意味していると期待します。とくに一中・五中の改築事業は、約10年にもおよぶ計画であり、次代の学びのカタチを創る営みです。<いまと未来の架け橋>となるものです。

ラーニング・コモンズの発想を重視し、生徒個々(市民も含めて)の多様な学びのニーズに応える推進内容であってほしいと思います。単に学校単位での教育課程を実施する校舎との発想から、生徒を軸にした学びの場とその延長としての市民の生涯の学びを扶けるコンセプトの重視が求められます。その実現に向けたヴィジョンであると理解します。

その中核に位置するのが、本市が得意とする図書館機能を十分に活かすこと、そして次代の知を創出するICT環境を整備することであると考えます。15歳の生徒たちが20年後・30年後をどのように生きるのか、その未来像を多様な感性で描ける推進を期待しています。<図書館とICT>に学ぶ生徒の姿を具現化するのが本計画だと思えます。

2 事業2～7 学校教育の推進

これらの事業推進は、いずれもコロナ事態とは逆のベクトルを必要とする教育活動です。とりわけ三密の状況を求め、そこでの対話のある深い学びが不可欠です。その意味で、これらの展開にあって担当課の努力と各学校の実践の工夫が読み取れるところです。

- 人権の学びは、子供たちの日々の生き方のベースになるものです。自他の存在を大切に、愛するところが子供個々の学びを支えます。アンケート調査やSC(スクールカウンセラー)の面談等を通して、子供理解を深め、子供の自己肯定感や他との協働の力をはぐくんでいます。
- 市民科の推進では、試行授業や研究発表等により着実な実践が見られます。ここでの学びは、子供の市民感覚の醸成や市の文化的・物的財産の享受に資するものです。その効果や実績を子供たちはもちろん市民全体が共有できることを願っています。
- 義務教育での言語学習はすべての学修活動の基礎基本です。より一層の充実を期待します。とくに英語の修得はダイバーシティの力量形成に必須の課題です。単に英語の授業充実に依拠することなく、子供個々が自信のあるコミュニケーション力を獲得するよう

各学校がどのような実践を行うのか？その探究に期待します（p21；課題②）。

- 教員の研究研修は、子供の意欲ある学びと一体のものです。子供の個々の主体的な学びは、先生の専門性のある研究実践の証左といえます。この逆も真なりです。その営みに＜子供をみる眼と先生を愛する心＞が深く関与します。この具体的な検証を期待します。各校の研究や開発校の研究発表などにそのエビデンスがあるものと思います。職層研修や年次研修・専門研修など（「令和2年度教員研修年間計画」）の成果は各教員の資質形成にとどまることなく、子供の学びそのものに反映されることがその目的であると考えます。この視点からの検討と研修態勢の見直しを願うところです。近年の教員採用試験の倍率低下と教員個々の専門的研究力の欠如を危惧しています。

また、GIGAスクール構想によるICT活用の学び合いの実効性も急務です。「コンピュータ通信」の有益な活用を期待しています。この活用能力に関しては、教員研修というよりも子供たちの活用能力に教員自身が学ぶ必要があると思われます。

- 学校・家庭・地域の協働体制の有り様が、次代の教育観とそのシステムを形成するものと考えます。地域コーディネーターの活躍や協働通信発行の成果などに学ぶところです。「学校」と「家庭・地域」の力量バランスをどのように保つのか？その見極めこそが重要であると考えます。その均衡状態の中にあり、それをよくみて、体感しているのが各々の子供たちです。自らの成長と日々の学習の事実を子供自身が感得しそして安心して生活するところに、このシステムの存在価値があるように思います。
- 教員の働き方が時間外勤務時間（とくに100時間超え）との関連で課題にされています。専門職としての「先生」の場合、この対応では片付かないものが多々あるように思います。専門職の意義（やりがい）は、その時間数との連関を超えるものです。教委や校長等からは見え難いもの（数量化できない）でしょう。専門性の高い「先生」を信頼し、子供たちの学びの事実やその成長に学ぶプロセスに＜先生の働き方＞があると考えます。それゆえ、先生の専門職外の時間的・物的仕事からの解放が急務です。先生個々の＜勉強時間の保障＞と＜教育者の自覚＞が求められるところです。

3 事業8～10 多様な学びの推進

個々のニーズに呼応する教育支援の在り方は、社会の人権意識の醸成とともにその多様性を受け容れる方向にあります。p26の目標および実績等に共感し、その着実な展開をさらに願うところです。これらを「評価」（p26）としてみると、そこにある子供個々や関係者等の学び（支援の実感）がどこにどのように表現されているのか？を相互共有する必要があると思います。今回の配置校方針の決定の周知の共有はうれしいことです。

ただ、もし支援学級や設置校の子供たちや先生たちだけの理解に留まることがあるとすれば残念なところです。「きょういく武蔵野」などの情報発信や学びの場づくりの実績がすべての教育関係者・保護者等にどのように周知され理解されているのか、そのアンケート調査等の実態も把握しておきたいところです。すべての市民が支援してこそ、本事業の意義があり、その目的の達成もかなうものと考えます。

また、SSW（スクールソーシャルワーカー）やSC（スクールカウンセラー）の有効な活用は

不安や悩みのある子供たちの生き方を支える力になります。「むさしのクレスコーレ」の実践についても、不登校に向き合う生徒たちの居場所としてユニークで現実を見据えた取り組みであると思います。その成果に期待します。

さらに、食育の充実の観点から、新調理場の整備と運用が着実に推進されることをうれしく思います。子供の心身の成長と教育活動の充実は、食育と健康にその基盤があります。子供たちの学びの基本エネルギーとなる本事業の実効性のある具体化を願っています。

4 事業 11～13 スポーツの推進

本事業の中心的な位置を占めるとされる東京 2020 オリパラ関連の推進が、コロナ事態にあってある意味で理不尽な予定変更等を余儀なくされたことを残念に思います。そのご苦労を察します。その対応課題を R3 年度の実施に活かすことを期待しています。

「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査報告書」(R3.3)の内容を興味深く拝見しました。このデータを学校教育の指導内容や市民生活にも活かし、各施策に反映していくことを願います。調査方法や分析などとても充実した内容であると理解します。

5 事業 14～15 歴史館等の運営

本事業の各内容は、市民個々が自らの文化度を実感できるものであると思います。歴史館の存在とその活動内容が多くの子供たちや市民に理解され、学び合いの場になることを願っています。「縄文土器講座」や「ドッキーをつくろう！」などでは多くの学び合いの実績があったものと思います。その活動内容の実際場面や学び体験の活かし方などをもとにした参加者の評価・意見等を具体的に知りたく思います。

また、ポストコロナに向けて SNS による広報活動や Zoom 講座など、市民のニーズを把握した取り組みをうれしく思います。市民全体が互いに協働しながら、武蔵野の文化の豊かさをさらに価値ある高いものに刺激していくことを期待しています。さらに、歴史館が有する文化財を小・中学校での出前授業のカタチで活用していくことはいかがでしょうか。子供たちにも多くの歴史文化を体験的な学びとして提供できるものと思います。

6 事業 16～20 図書館事業の推進

本事業の実績・評価等から、図書館の力が市民の情報拠点の役割を十分に果たしていることが理解できます。コロナ事態にあって、無線 LAN 設備等が安定稼働している、図書館情報システムの利便性向上を図っている、図書館人材の育成を意図している、SNS を活用した情報発信ができているなど、市民のニーズに配慮した運営を可能にしています。

また、第 2 次子ども読書活動推進計画を策定し (R3.3)、読書活動を通じた豊かな心の形成や学び意欲と生きる力の育成に努めています。ただ、その際の調査において中学生の不読率が 21.2% であり、全国や都のデータよりも高いことが気になります。多様な要因が想定されるようです(各家庭の多様化した教育観、中学の進学問題や習い事・塾通いの課題など)。地域・保護者等への啓発活動とともに、小中学校での図書館利用学習の実践を積極的に行うことが大切です。その状況把握にも努めていただければ幸いです。

1. 総括的意見

武蔵野市は、地域コミュニティを基盤とした住民自治の理念を有し、学校教育や生涯学習においても市民参画を前提とした取り組みが多く見られる。

社会を担う将来の構成員に既存の文化や伝統を伝える機能が教育の本質であるならば、武蔵野市が市民性の育成という基本方針を学校教育の中核に位置付ける意義は大きい。特に学校教育において、武蔵野市では、「自立」、「協働」、「社会参画」のための資質・能力を育むとされる「武蔵野市民科」を独自に設定するなど、市の基本理念を市民に継承させる特徴的カリキュラムを有する。このカリキュラムは市の理念を正しく具現化するものとして内容の充実が図られるべきであり、子ども、保護者、そして市民や関係者全員がその内容や意義を認識すべきものである。その上で、武蔵野市の地域資源を「社会に開かれた教育課程」の一環として活用することや、市民性の育成の名の下に学校・家庭・地域の連携・協働が一層推進されることが望ましい姿であろう。

2. 個別事業への意見

(1) 一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援の充実

次世代の学校教育では「個別最適化」が求められるとされ、それぞれの子どもの特性に応じたテーラーメイド教育が一層志向されるようになるであろう。

複雑な社会状況やさまざまな事情により、学校での生活や集団活動に対し、心理的負担を抱える児童・生徒が一定数いることも事実である。このような児童・生徒に対し、適切な居場所の提供や措置を取ることは教育的配慮として今後、益々必要となっていくと推察される。そのため、武蔵野市教育委員会が、チャレンジルームや「むさしのクレスコーレ」といった学校以外の居場所を設定し、提供することに自然体で着手していることは高く評価される。

学校生活に対する個別最適化のオプションは多様にあるのが望ましい。武蔵野市では、スクールソーシャルワーカーなどの福祉専門職が全中学校区に配置され相談体制が整備されている。子どもの特性に沿った適切な学習環境の提供や支援の検討に、スクールソーシャルワーカーの役割は大きく、今後は、個々の子どもの情緒面に配慮し、居心地の良い学習環境を個別に提供するため、多様な学習環境を広く学校教育として捉える柔軟な姿勢が求められていくとも思われる。今後も適切な対応を可能とする相談体制の充実が期待されるであろう。

(2) 長期宿泊体験活動の教育的意義

学校行事や体験活動は、楽しく、懐かしい思い出となることが多く、人生の基盤として人生に彩りを添えるものである。コロナ禍にあって、このような機会は大幅に制限されざるを得ず、長期宿泊体験活動である「プレセカンドスクール」「セカンドスクール」が実施されなかったことも非常に残念なことではある。しかし、このような状況は、あらためてこの活動の意義を検討する良い機会でもあったと思われる。

長期宿泊体験活動は、2015年にグッドデザイン賞を受賞し、多くの教育関係者の注目を引

いたことからわかるように、武蔵野市教育委員会が誇るべき素晴らしい教育活動である。自然に恵まれた農山漁村に長期間滞在する機会を、児童・生徒に等しく提供する活動は、教育的意義として座学に勝るものがある。「同じ窯の飯を食べる」との言葉があるが、長期間一緒に過ごす子どもたちにとって、仲間意識や思い出を共有できることは、人生の中で得難い経験である。このような経験の持つ効果は、すぐさま出るものではなく、人生の長期的スパンの中で表れてくるものであろう。それゆえ、昨年度この事業や多くの学校行事が中止となる中で、経験ができなかった児童・生徒に対しては、これらの体験等を補う取り組みが十分に検討されることを期待したい。

(3) 図書館や武蔵野ふるさと歴史館の活動の興隆

「第2次武蔵野市子ども読書活動推進計画」が策定され、武蔵野市の子どもの読書活動は一層推進されることと思われる。特に、市立小中学校の学校図書館で市立図書館の本を借りられる貸出システム構築に向けて研究が着手されることは喜ばしいことである。住む地域によっては、子どもが一人で市内の図書館に行くことができない場合も多い。図書館の利用が保護者の引率によるものであれば、子どもの図書館利用や図書館を活用した読書活動は保護者の図書館に対する意識や行動に大きく依存することになる。学校図書館で市立図書館からの貸出システムが利用できるようになれば、このような格差を是正し、子どもが学校で等しく市立図書館とつながり本を借りることが可能になる。また、市立図書館とつながることは、検索作業や調べ学習などが円滑になり、学力向上や子どもの知的好奇心の喚起にも大きな意義があると思われる。加えて、このことは、将来の市立図書館ユーザー、そして生涯にわたって学習できる者の育成も意味する。

その他の社会教育施設としては、武蔵野ふるさと歴史館が特筆に値する。武蔵野ふるさと歴史館では、学術的に意義のあるさまざまな活動がなされている。武蔵野市に歴史に関わる学術的知見を蓄積する施設があることは、武蔵野市市民の民度を高めるために有益である。その内容を広く市民に知らせ、子どもから大人まで武蔵野市への愛着や帰属意識を醸成するための資源として活用することが望ましい。歴史に軸足を置くことは、市民性を高める教育の根底に存在する。

以上、武蔵野市教育部の重点事業については、地道に、また特色ある活動が種々行われていることを確認した。その中には、誇れるような先駆的な活動もあることから、優れた教育活動の実践との認識を関係者内外で共有し、社会に対し広くその活動を伝えていって欲しいと思う。

明星大学教育学部教育学科特任教授 樋口豊隆

1 総評

このコロナ禍においても、教育先進市武蔵野にふさわしく教育委員会が先を見つめ積極的に施策を展開していることに感銘を受けた。様々な取組を具体的に行っていることは大変評価するところである。また、武蔵野市教育委員会の基本方針1には「子どもたちが自らの力

の向上に向けて努力し、力を最大限発揮できるように、自信や意欲を高める教育を推進する」
「自分と同じように他者を大切にするよう人権教育を充実させるとともに、他者と協働してよりよい生活や社会を築いていくために必要な市民性の育成に努める」があるが、各課の各事業が個別バラバラに展開しているのではなく、この基本方針1をしっかりと基盤としてつながっていると感じる。

2 各課について

(教育企画課)

事業1についてであるが、学校改築の趣旨はたいへん良いと考える。

令和の日本型学校教育 2021年1月26日中教審答申、東京都教育施策大綱 2021年3月30日などが次々に出され、これからの学校教育の在り方が示されているところであるが、シンプルな原点は「学校とは学力を身に付ける場であり、社会性を身に付ける場」にある、どのように時代が変化しても変わらない学校の「普遍的な使命」をしっかりと土台に据えていただきたいと考える。特にコロナ禍で改めて認識されるのは、子どもたちの社会性を身に付ける場として学校の機能である。子どもたちが自由に話し合える場、リラックスできる空間、障がいのあるなしに関わらず交流・協働のできる学校という子ども主体のコンセプトを教育企画課が大事にしていると感じた。

(指導課)

事業2、3、4に示されているように、指導課が人権を尊重する教育に重点を置き、施策を展開していることは大変評価できる。事業2評価②にあるように「長期宿泊体験活動を児童生徒一人一人が自信をもち、自己肯定感を高められるように活躍できる場として見直す」と自己肯定感の向上を視点にしていることは特記すべきことと考える。子どもの自尊感情の低さは国際比較などでもよく指摘されるところではあるが、例えば東京都教職員研修センターの研究では、子どもの自尊感情を構成する要素のなかで「人との関わり合い」の観点での自尊感情は高く、「他者貢献」で感じられる「自分の価値」が「自分の良さ」への自覚、そして自信や勇気につながるのが我が国の子どもの自尊感情である。長期宿泊体験活動のみならず、日常の学校の児童会生徒会活動や地域清掃などの奉仕活動、ボランティア活動、職場体験など、学校の活動の様々な「人との関わり合い、感謝される体験」を自尊感情の向上の視点で展開していただくとともに、この視点をもつことが事業3「武蔵野市民科」をさらに輝かせる教科になると考える。なぜならば、「武蔵野市民科」の学びは子どもたちの自尊感情を高めることに必ず資するからである。事業4も「人とのコミュニケーション能力の向上は人権教育である」という視点で捉えていただきたい。事業7については、事業6にも関連させ、さらには中学生では生徒会役員などにも考えさせる機会をもち、「働き方を改革するとはどういうことか」。教員の過重な労働が指摘され、それを軽減するだけでなく、それが一層よりよい学校になっていくことを理解させ、自分たちには何ができるか考えていただくことも必要と

考える。このコロナ禍での学校のプラスマイナスをぜひ検討していただきたい。

（教育支援課）

事業8においては、「障がいのあるなしに関わらず」というインクルーシブ教育の理念が武蔵野市においては、例えば「交流共同学習支援員」という制度をもつなど手立てのある具体で進められていることが理解できた。「特別支援教育」から「支援教育」の流れのなかで、教育支援課の施策・考え方が教育企画課の学校改築や指導課と連携していることも大いに評価できる。事業9では、チャレンジルームだけでなく、むさしのクレスコーレを開設するなど、選択できる子どもたちの「居場所」を増やし、積極的行動的な支援を行っていることも評価できる。「不登校」は「学校不登校」なのであり、そういう子どもたちが存在するのはマイナスのことではなく、学校という社会とつながれなくとも、自分がつながれる社会（居場所）があることが大切であり、いたずらに学校復帰を目指さない、不登校ゼロを目標に掲げない、一人ひとりの子どもの生き方を尊重する教育支援課・教育委員会の考え方は先進的であり素晴らしいと感じる。

（生涯学習スポーツ課）

多くの事業が中止になる中で動画配信をされた試みはたいへんよいと思う。ある学校で昨年動画配信をしたら、ダンスの視聴がとても高かった事例もある。ぜひ、どのような年齢層でどのような種目の視聴がよかったのか、その成果も上げていただきたい。

（図書館）

コロナ禍で様々な活動が制限され、密にならない、静かにできることとして、児童会図書委員会の子どもたちが中心になって学校図書週間・図書紹介・図書コンテストなど企画実施した学校の事例がある。その意味においても「第2次子ども読書活動推進計画」は従前よりも重要と考える。ぜひ、積極的な学校・子どもたちを主体にした交流をお願いし、子どもたちの自尊感情・自己肯定感の向上につなげていただきたい。